専念寺通信

専念寺通信

五月号（NO．９３）

爽やかな季節がやってまいりました。５月はじめから、夏のような日差しの日が始まりました。専念寺のいちょうもけやきも、新緑がますますその色をあざやかにし、石碑の横のこでまりもご覧のように咲きそろいました。みなさま、お変わりなくお過ごしでいらっしゃいますか。

☆施餓鬼会法要

５月２５日は恒例の施餓鬼会法要を行ないます。施餓鬼会とは、飢えに苦しむ餓鬼に飲食（おんじき）を施す法会（ほうえ）です。施餓鬼会の由来は釈尊の弟子、阿難の故事にもとめられます。ある夕暮れ時、阿難が瞑想していると、口から炎を出す焔口餓鬼（えんくがき）が現われ、阿難の生命があと３日であると告げ、立ち去ります。阿難は釈尊のもとへいき、このことを伝え、教えを乞います。釈尊の教えに従い、阿難は餓鬼道に墜ちて苦しんでいる焔口餓鬼のための法要をいとなみました。その結果飢えに苦しむすべての餓鬼は救われ、阿難も、福徳寿命を得ることができたのです。この法要は、餓鬼道に墜ちて苦しんでいる人に飲食を施すだけでなく、供養を通して、いま困難な状況にあるこの世のすべての生きとし生けるものに思いを致し、あわせて私たち自身が救われることを願う、そのような意味があります。

☆豊かさと貧しさ

私たちの国は、世界のほかの国と比べれば「豊かな」国と呼ぶことができます。「先進国」と呼ばれ、義務教育もきちんと整い、国民の識字率も高く、つい最近まで国民がみな、自分自身を「中流」の生活を送っていると認識していました。この数年、ニートと呼ばれる、若くして定職のない、得にきわだった技術を持たずに生きている若者の存在がかつてないほど増えていると報道されるようになりました。「ワーキング・プア」という言葉も聞かれます。働いても働いても、貧しさから抜け出すことのできない人が増えているのです。まじめに働けば、いつか必ず報いられ、今は手に入らないものも手に入るようになる、といった少し前までの常識がくつがえされつつあります。定年まで勤めれば、退職金と年金で、静かでまずまず余裕のある老後が持てるという状態ももはや望めません。国に３０年、４０年と払い続けた年金が、国の管理のずさんさから無くなっていて、年金自体を受け取れない人も出てきているからです。社会全体をおおう、この間違った「弱肉強食」の論理が、若い人たちに希望や目標を持ちにくくさせています。ひとりひとりが自分から強い意志でみずからの目標を作りださない限り、経済的にも精神的にも「豊か」にはなれません。私たちは自分たちの国をこのようにしたいと望んできたのでしょうか？子供や高齢者、障害のある人、そのような、いわばかつての自分、未来の自分である存在を残酷にも切り捨てるような国にしたかったのでしょうか？「発展途上国」と呼ばれる国からうらやまれる私たちは、実は、阿難のもとを訪れた焔口餓鬼と紙一枚へだてた場所にいるのかもしれません。私たちは真の豊かさを、どこへ置き忘れてしまったのでしょうか。

平成２０年５月１日

大黒